

山筆

第45号／2008年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋 (41回)

TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail: tsuruwa@rsg.gr.jp

関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/



牧野植物園は今年50周年を迎えた。園内に立つ牧野博士の銅像【高知：田口保雄特派員撮影】

土佐を想う

森 郁夫 (41回生)

高知を離れて四十有余年。母親は未だ故郷に健在なので、年に何度か帰高する。色々な場所で暮らしてきたが、私にとって故郷は何時までも高知である。・・・何時か帰りたい場所である。

色々な方とお会いする機会も多いが、出身が高知だと言うと「坂本龍馬ですね」と言われ、更に土佐高だと言うと「甲子園の全力疾走ですね」と言われる。そういうことで随分と得をして来たのではないだろうか。

自分でも、およそそれに似つかわしく無いのに、海外雄飛を志し、太平洋に船を漕ぎ出して、結構、文武両道の人生を送ってきたように思われる。

仕事の関係もあって世界中を回ることが多い。色々な文化に触れ、色々な人間と出会う。欧州では歴史、文化に圧倒され、米国では富と文明に圧倒される。しかしこれらの世界は間違いなく新興国BRICsによって動いていく事になる。そのエネルギーは実際暴力的でもある。

今、金融不安が世界中を覆い、世界の構造が大きく変化しつつある。何が起こるのか全く予想も出来ない状況にある。そのような中で日本がどの様な役割を果たしていくのか？もはや日本国という範疇では狭すぎ、龍馬が土佐から飛び出したように、我々は本当の意味で世界に飛び出さなくてはいけない時なのだろう。

そうやって世界で暮らしていく中で、日本人、土佐人としてのアイデンティティは何時までも保ち続けたいものである。

たまには堀詰電停前の葉牡丹で酒を飲みながら・・・。

(富士重工業株式会社 代表取締役社長)

関東支部活動報告

事務局長 二宮 潔(49回)

一年前に書いた「活動報告」を読み返すと、地球温暖化(猛暑)に始まり、近頃の世相に触れ、挙句の果てには、「赤福、お主もか。」とありました。その後も船場吉兆に中国の冷凍餃子と隠元豆、北京オリンピックに洞爺湖サミットを楽しんだF首相は、なんと前のA首相と同様、突然の敵前逃亡。ひよつとしてF氏には世界金融危機が見えていた?今のA首相もお坊ちやまですが、大丈夫ですかねえ。ひよつとして、年内選挙が決まると、原稿差し替えかな?クワバラクワバラ・・・。

さて、今回も事務局からは募金協力をお願いです。既にご案内の通り、母校の新校舎建築プロジェクトは来年11月の竣工を目指してスケジュール通り進捗。夏休みには恒例のホームカミング総会に参加し、校長先生のご案内で既に一部使用を始めた新体育館と高校棟新校舎を見学。耐震設計による素晴らしい環境が着々と整備され、現役後輩たちの

笑顔が眩しく映りました。昨年1月に振興会・同窓会・学校の協力でスタートした新校舎建築募金委員会も同年4月から5カ年計画で募金活動を展開中。既に繰り返して、皆様のお手元にも募金協力のお願いが届いていることと存じます。総工費40億円、同窓生からの寄付金目標4億円、そのうち関東支部の目標額は3千万円です。募金スタートから一年半を経過した10月末現在で、募金総額1億9千3百万円(目標比48%・募金件数2388件)。お蔭さまで関東支部は2千4百万円(同80%・同585件)、目標額まであと6百万円に迫っています。

「筆山」第42号にて泉谷支部長と溝淵顧問(本部副会長)から、そしてこの夏にも第43号と共に『二つ目のお願』と題し支部長から、重ねてのお願いの寄稿がございましたように、『皆さん、もうちょっとだけ、もうちょっとだけで、良いことしませんか?』特に、まだの方々にはどうか

よろしくお願いします。送金方法は次の通りです。

①四国銀行 潮江支店 普通口座番号 0658838
土佐中高等学校新校舎建築募金委員会

②高知銀行 南支店 普通口座番号 0795769
土佐中高等学校新校舎建築募金委員会

③郵便振込
加入者 土佐中・高等学校
新校舎建築募金委員会
口座番号 01600111984

※お願い
・銀行ATMをご利用の場合には、事務局には「カタカナのお名前」しか届きません。銘板の作成、ホームページへの掲載、お礼状の送付などに必要な「回生・ホーム・住所・氏名(漢字)」などをメールやFAXなどでお知らせ頂ければ幸いです。

・郵便振り込みの場合には、通信欄に回生・ホームをお書き下さい。
・事務局から振り込み用紙をお送りする場合以外は、振り込み手数料はご負担下さい。
・現金書留による送金や学校窓口での現金による受付も行っております。

母校だより

学校長 池上 武雄(28回生)

◇前理事長川崎幾三郎様ご逝去

本校理事長を三度にわたって務められた川崎幾三郎様が9月1日お亡くなりになりました。昭和23年3月第5代理事長に就任された時は、戦災によるバラックからの校舎建築事業を、昭和32年4月から第7代理事長の時には、本校創立50周年記念事業としての校舎新築(現在中学棟と体育館が残っていますが明年8月には取り壊し予定)を、さらに平成17年3月、三度目の第9代理事長に就任され現在進行中の新校舎建築事業を決断いただいたという、三度にわたる理事長ご在任中いづれも校舎改築という大事業を推進され本校発展の礎を築かれました。

ご病床にあつて生前には新校舎をご覧いただけませんでした。が、お通夜の日ご遺体を乗せた車が本校を回られ教職員ならびに大勢の生徒達がお別れのご挨拶をいたしました。9月5日の社葬には、宮地

貫一理事長が葬儀委員長を務められ告別の辞を、また私が学校を代表して弔辞を述べさせていただきます。告別式には大変多くの方々が会葬され、改めて故人のお人柄とご功績をしのび心からのご冥福をお祈りいたしました。

◇新校舎建築プロジェクトの進捗状況

ここ2年台風の到来が全くないという天候にも恵まれ第一期工事は本年6月25日完工、免震構造の新高校棟と耐震構造の新体育館の引渡しを受けました。

6月28日から3日間新校舎への移転大作戦を挙行、無事移転を完了し、7月1日から新しい高校棟及び体育館での授業が始まりました。

これより先、6月4日には京都大学総長尾池和夫先生(34回生)が新校舎を視察されました。高校棟地下の免震構造に対しては「震源地が遠くここまで来たときには横揺れする南海地震にはうつつの構造。非常に良いモデルケースで世界中に宣伝して欲しい」(朝日新聞)と太鼓判を押して下さいました。

7月14日、旧教職員の皆様にも参加いただき旧中央棟な



らびに旧高校棟の解体式をとりおこない、これまでの学び舎に感謝し第二期工事の無事を祈願いたしました。また旧校舎定礎からタイムカプセルを取り出してご披露したほか新校舎をご覧いただきました。

第二期工事も8月21日から始まり極めて順調に工事が進められております。第一期工事でおなじみとなった赤いタワークレーンも高々と立ち、現在は地下杭設置工事が進行中です。なお第二期工事の完成時期は、来年6月末エントランス部分と中学棟が完成、次いで旧中学棟と旧体育館の解体工事を経て運動場の整備がなされ11月には全プロジェクトが完了する予定となっております。

◇新校舎建築募金について

多くの方々のご協力をいただいて平成20年9月1日現在、件数2,281件 金額186,306千円となっております。皆様方のご協力、ご支援に心から感謝申しあげます。

◇落雷訴訟決着へ

平成8年8月大阪府高槻市でサッカー試合中に落雷事故に遭い重度障害を負った当時本校一年生北村光寿さんとご家族が、本校ならびに主催者

の高槻体協に対して起した損害賠償訴訟が、最高裁を経て高松高裁での差し戻し審判決（平成20年9月17日）を被告側が受け入れることで確定をみました。

10月1日、私ほか先生2名が北村光寿さん宅を訪問し、学校側の責任を認め、長期にわたり心労をお掛けしたことを謝罪するとともに、この事故を教訓として二度とこのような学校災害を起こさないよう生徒の安全対策に取り組んでゆくことをお約束いたしました。

また、判決に従って各損害賠償金元本および遅延損害金を誠実にお支払いすることのほか、今後北村光寿さんの障害克服のため、同窓生として支援してゆくこともお約束しました。（平成20年10月末）

本部だより

副幹事長 宮地貴嗣（61回生）

先ず初めに、悲しいご報告を申し上げなければなりません。去る9月1日に土佐中・高等学校の今日までの発展を支えてこられ、三度に亘つて理事長の重責を果たしてこ

れました、前理事長の川崎幾三郎氏が逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

「2008

ホームカミングデー」

さて、本年のホームカミングデーは母校が改築中のため、学校見学会と総会・講演会・懇親会の二部構成で8月16日（土）に行いました。

13時～15時 学校見学会

完成したばかりの新しい体育館・剣道場・柔道場・高校棟・食堂などを見せていただきました。来場された同窓生は250名を超え、ご家族連れでの来場も多数ありました。当日は旧体育館・中学棟をあわせて見ることで、新旧の校舎を比べることができ、歴史の流れを感じることができました。

15時30分～16時30分 総会

（会場：高知新阪急ホテル）

2007年度の決算が承認されました。

16時30分～17時30分 講演会

高知ファイティングドッグスオーナー北古味鈴太郎さん（68回生）と社長武政重和（68回生）さんに「株主総会」というテーマで講演をいただきました。

68回生の二人が若い力で高知ファイティングドッグスの経営に携わっています。苦勞も多いですが、土佐高校同窓生の皆さんにも協力をお願いしたいとの熱いメッセージが送られました。

また、同じ68回のデハラユキノリさんの飛び入りスピーチ&パフォーマンスもありました。

17時30分～19時30分 懇親会

お待ちかねの懇親会です。今年卒業した83回生を中心とする土佐高校卒業生のよさこいチーム「陽」のよさこい踊りで幕を開け、川崎卓巳実行委員長（58回）、宮地貴一同窓会長（21回）、池上武雄校長（28回）にご挨拶をいただきました。

かけつけていただいた尾崎正直知事（61回）からは、「土佐高校で学んだことが自分の大きな礎になっている。一緒に力を合わせて高知のために活動して欲しい。」と挨拶をいただき、乾杯をいたしました。

最後に清谷知郎さん（52回）・天造豊彦さん（52回）のリードによる校歌斉唱とエールを行い、安岡範悦幹事長（39回）による中締めでお開きとなりました。



ました。

しばらく母校で開催していただきましたホームカミングデーを久しぶりにホテルで開催しましたが、200名を超える多くの方、そして幅広い年代の方にお越しいただき、楽しくそして盛況のうちに終えることができました。

本年お越しいただいた方はぜひ来年も友人・先輩・後輩を誘って、そして本年お越しいただけなかった方はぜひ来年こそはご出席ください。未確定ですが、来年は8月8日（土）に開催の予定です。

北海道支部だより

支部長 池川昌弘（39回生）

関東支部の皆さん、こんにちは。北海道支部長を仰せつ

かっています、39回生の池川です。北海道支部は2005年に、当時札幌在住の窪田さん(38回生)が中心となって設立されました。現在、総勢60名弱の小さな支部ですが、本部や他支部のご支援を頂きながら、活動を続けています。北海道支部は支部会員の出入りが多く、窪田さんが昨年5月に高知に帰られ、この度、10月1日付けで、北海道支部設立準備段階から支部のために尽力されました事務局の島村さん(49回生)も急に東京転勤となりました。支部運営に取りましては大打撃です。後任の事務局長は、山本さん(53回生)に無理を言ってお引き受けいただき、複数の幹事で事務局をサポートしていく体制になっています。かく言う私も来年3月には定年を迎え、和田幹事長や幹事の方々に後を託して、高知に帰る予定です。家内(旧姓山崎)も同じ39回生ですので、北海道支部から少なくとも2名が退会します。なにぶん少人数の支部ですので、特定の個人に過度の負担が掛かることの無いように、新しい幹事の発掘とともに、事務の簡素化を含めて支部運営の見直しを行う



ことが必要と考えています。このような新体制のお披露目も含めて、去る9月6日(土)に小樽に近い朝里川温泉で、北海道支部総会を開催しました。総会には、井上教頭先生をはじめ、本部、関東支部、東海支部、広島支部の代表の方々にもご出席を頂き、支部活動報告と新しい支部運営体制をご承認いただいた後、アットホームな雰囲気の中で懇親会を行いました(写真は懇親会開始前に撮影したものです)。例年は札幌市内で総会を開いていますが、温泉と

いう寛いだ雰囲気の中での今年の懇親会は、いつも以上の盛り上がりを見せ、夜遅くまで土佐弁を中心とした会話が弾みました。

話は変わりますが、今年8月のホームカミングデーで池上校長先生から伺った話では、土佐高から今年5名が北海道大学に合格したとのことでした。社会人の出入りが多い支部としましては、最低でも4年は北海道で生活することになる

学生の方々に支部を盛り立てて頂き、支部運営の安定化と活性化を実現したいと考えています。因みに、全国の国立大学の中で「リゾート大学」と呼ばれる大学は、信州大学と北海道大学の2校だそうです。これは、学生がリゾート気分で大学生活を送っているという意味ではありません。受験生に志望理由を尋ねると、「自然が豊かで、美しいから」という理由を挙げる受験生が多い大学という意味だそうです。そんな北海道に、是非、沢山の土佐校の卒業生をお迎えしたいものだと思っております。

私事で恐縮ですが、今年の8月初旬、家内と一緒に2泊3日で念願の「利尻山登山」

をしました。利尻、礼文・サロベツ国立公園のシンボルとも言える利尻山は標高1721mの独立峰で、丸1日かけての登山は前期高齢者予備軍にとっては結構きつい登山でしたが、改めて北海道の自然の豊かさと雄大さを実感しました。皆様、是非一度、北海道にお出かけ下さい。

東海支部だより

幹事 瀬沼憲司(64回生)

東海支部では月に一度第2水曜日に二水会と称して集まっているのですが、そこに私が顔を出すこと必ず言っていたのが、「今年は名古屋グランパス調子良いね。」の一言です。今年は名古屋グランパスの英雄である、ピクシーことドラガン・ストイコビッチ氏が監督となり、メディアへの露出も大幅に増えました。

ピクシー・ストイコビッチの名はサッカーにあまり詳しくなくてもお聞きになったことがあるという方が多いのではないのでしょうか。Jリーグの歴史の中でも最も光り輝いていた選手の一人であり、名

古屋グランパスの英雄であり、伝説でもあります。ピクシーは監督経験のない新人監督ということもあり、不安視する声もありましたが、監督就任前までは、名古屋で現役引退後セルビアモンテネグロサッカー協会の会長という日本と言うJFAの会長に相当する立場を経てセルビアのビッグクラブであるレッドスターベオグラードの会長を務めており、クラブの運営からすべてを心得てカリスマ性を備えた監督として名古屋に帰ってきてくれました。

ピクシーで失敗するわけにはいかないというフロント、現場の危機意識、そしてピクシーの持つカリスマ性すべてが噛み合い、この原稿を書いている時点では2位と、なんと優勝争いからみ東海を元気づけてくれています。

グランパスの選手の中にはもちろん日本代表に選ばれている選手がいます。日韓ワールドカップの正GKの楢崎正剛選手とドイツワールドカップで得点したFWの玉田圭司選手です。そして北京オリンピックで戦った吉田麻也選手もいます。

実は北京オリンピックには

私も3人の子供を連れて応援に行きました。第2戦ナイジェリア戦を観戦しました。結果こそ残念でしたが、そこで日本代表唯一のゴールを決めた豊田選手もグランプラスからJ2山形へレンタル移籍している選手であり、応援していたので個人的には非常に喜んでおりました。

この原稿が載る頃には、Jリーグの結果も出ているでしょうが、結果がどうあれ、これからも応援していきたいと思っています。名古屋でのホームゲームはもちろん、アウェイのゲームも時間が許す限り応援に行っております。関東へも今年は日本代表なども合わせますと10月末現在で7回程駆けつけています。Jリーグチームを応援されておられる方がお見えでしたら是非お声をおかけいただき、試合後に飲みながらでもお話ししたいものです。

Jリーグ最終戦が終わった頃に東海支部冬季懇親会が行われます。サッカーの話を笑って出来れば嬉しいのですが、さてどうでしょうか。

私の人生の一部であるグランプラスについて長々と書きましたが、冒頭にも書きまし

たとおり第2水曜日に東海支部の集まることの出来る面々で飲んでいきますので、その時名古屋に來られることがありましたら是非参加ください。最後に同窓生の皆様のご健康と関東支部のますますのご発展をお祈りいたしまして、東海支部便りとさせていただきます。

関西支部だより

幹事 中田志保美(56回生)

皆さまこんにちは。関西支部よりお伝えします。今年度の関西支部総会は、四月十九日にシエラトン都ホテル大阪にて行われました。

今回の目玉はなんといっても、土佐高野球部OBで、日本高野連顧問永野元玄氏(29回)の講演です。「野球もはやま話」と題して、高校野球の審判をされている時のエピソード、始球式での小泉元首相の様子など、興味深いお話を聞くことができました。

永野さん(偉大な大先輩ではありませんが、敬意と親しみを込めてこう呼ばせていただきます)のお話は、知的なユーモアがあり、必ずまわりへの

思いやりやお気遣いが込められていて、心がホッとします。今度のお話も高校球児たちへの愛情が伝わる、いいお話でした。

関西支部では、かねてより総会への若手の会員(特に十代、二十代)の参加率が低いことが悩みのタネでした。しかしながら、今回の総会は、幹事や会員の積極的な声かけにより、相当数の若手会員に出席してもらうことができました。

特に学生さんに多く来てもらえたことが収穫でした。今後も同窓会が仕事関連や関西でのさまざまなネットワークづくりにお役に立てればと思っております。

さて、ここからは関西の耳より情報です。クリスマスには皆さんの自宅では毎年どんなケーキを召し上げるのでしょうか。最近是有名パティシエの一台六千円以上するケーキなどもあります。それはそれで特別なもの。普段に食べべるスイーツなら、お手軽で求めやすいものもいいですね。関西で、私が実際に食べてみて、評判もよいものを紹介します。

①ボックサン(神戸・須磨)

の「こだわりロール」。シンプルなロールケーキですが、奇をてらわず、誰が食べてもおいしい味。このお店は焼き菓子も評判がいいです。

②松竹堂(大阪・吹田)の「フルーツ餅」。新鮮なフルーツを白あんとおもちでくるんだ生菓子。メロン、柿、ラフランスなど六個セット。

③クラブハリエ(滋賀)のパウムクーヘン。いわずと知れた名品。あの口当たりは絶品です。東京では銀座三越などでも買えます。

④モンシユシユ(大阪・堂島)の堂島ロール。クリームにコクがあり、若い人に人気。百貨店の特別販売では大行列です。

⑤ナダシン(神戸・灘)のおはぎ、餅。甘すぎず、大きすぎず、いくらでもお腹にはいります。十個で六百円からという価格もうれしいです。

⑥番外編「神宗の「塩昆布」」。甘口でしつとりと上品な味。阪神百貨店ではよく、年輩の方の列ができています。

いかがでしょうか。ネットでお取り寄せ可能なものもあり、越しの際に、手に入れることができましたら、ぜひお試し

ください。

広島支部だより

広島雑感

支部長 沖 修一(40回生)

関東支部の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

広島支部は少人数ではありますが、この11月29日に行われる平成20年の支部総会を目指して、皆元気に頑張っています。

さて、話は変わりますが、最近高知自動車道が片側2車線になったと聞いています。私はまだ2車線になってからは通ったことがないのですが、追い越しが大変便利になり、

広島から高知までは3時間もあれば車で楽に帰省できる距離になりました。十分日帰り可能な距離です。羽田から龍馬空港へ飛ぶのと大差ないのではないのでしょうか。しかし、個人的には年を追うごとに公的にも、私的にも多忙となり、なかなか帰省ができません。特に私は中村(現四万十市)の出身であり、高知からさらに2時間ほどかかり、なにかと大変です。中村に

香川支部だより

事務局 大石 浩 (54 回生)

は 80 歳代後半の両親が、土佐高の 2 年後輩である弟夫婦と暮らしており、一方で安心はしておりませんが、なかなか帰省できないと内心忸怩たるものがあります。高速道路は窪川までは進んでも、中村まで延びるという話は、すぐにはないように聞いています。中村や室戸などの高知県の両端は開発から取り残され、よく言えば昔のまま自然の残った状態、端的に言えば老齢化と過疎化が進みつつある地域です。私が土佐中の時代に、中村から県交通バスに乗って酔いながら窪川まで行き、そこから国鉄の蒸気機関車で、トンネルの度に窓を開け開めして、鼻の中を煤で汚しながら、6 時間ほどかけて高知まで行っていた時代が、まだ活気があったように思います。

関東支部は同窓会員も多く多士済々です。天下国家を論じ、高知市のみではなく高知県全体を視野に入れて、高知の活性化を考えている方も多いと思います。高知県の沿岸部に高速道路が通り、風光明媚なおらんくの池で潮吹く魚を眺めながらドライブ帰省できるのは、夢のまた夢でしうか。(平成 20 年 11 月 16 日)

関東支部のみなさん、こんにちは。香川支部事務局の大石と申します。

香川支部の総会は「七夕総会」と称して毎年 7 月の第一土曜日に開催しています。今年は 7 月 5 日(土)の開催となり、当日は、母校から三浦教頭先生をはじめ、同窓会本部・各支部から 7 名の皆さまをお迎えして、例年どおり J R 高松駅前「高松シンボルトワー」で開催しました。

関東支部からは二宮潔事務局長が遠路ご参加下さいました。二宮事務局長は、宴会中は意欲的に参加者を廻られ交流を深められるとともに、東京に戻られてからも、当日名刺交換等をしたメンバーにメールでいろんな情報をご提供下さるなど、香川支部会員との親交を積極的に深めていただきました。ご多忙の中、本当にありがとうございました。

今年の総会は、19 回生の三澤大先輩を筆頭に、社会人 2 年目の 75 回生まで、46 名の仲間が集まりました。また、現

在高松在住の竹村節元教諭(英語)が初参加。さらには、仕事でよく香川に立ち寄られるとのことで関西支部の中塚望先輩(36 回)も飛び入り参加して下さり、いつもながら先輩・後輩入り乱れての盛り上がりとなりました。

毎年ぐずぐず気味のお天気も、開宴後しばらくすると回復し、高松シンボルトワー 17 階から瀬戸内の夕景を少しの間でしたが楽しんでいただきました。宴席では、順調に進む母校の建て替えにちなんだ話や、今年 5 月に高松で開催された春季四国大会に出場した野球部のことなど、母校の近況からいつもの昔話



まで大いに賑わい、あつという間に楽しい時間が過ぎました。

なお、今年度の役員改選では、転勤等による役員の異動もなく、現行体制のまま全員が留任することとなりました。引き続き、宮地支部長以下、現行支部役員をよろしくお願いいたします。

ところで、皆さんは N H K の B S h i / B S 2 「街道てくてく旅」四国八十八か所を「行く」という番組をご存知ですか。プロ卓球選手の四元奈生美さんが、四国八十八か所、約 1200 キロを歩いて踏破する様子を毎朝 15 分ずつ中継しています。今年 3 月からスタートした番組も、ロコミで次第に四国内に広がり、今では放送予定にあわせて地元の人達が四元さんが来るのを待ち受けている様子がよく見られます。10 月からは香川県に入り、10 月 24 日に結願の寺八十八番札所「大窪寺」で感動のゴールを迎えました。

残念ながら、私はお遍路さんの経験はありませんが、これまでに観光等で訪れたことのあるお寺や各地の素朴な風景また、現在でも残っている「お接待」の様子などを見て

いると、地元に住んでいながらも、何となくほのぼのとした気持ちになつてしまいました。歳を重ねるごとに、こういうのもいいなあと思いはじめた今日この頃です。

来年の香川支部総会は 7 月 4 日(土)を予定しています。もし四国遍路を予定されている方がおられましたら、飛び入り参加大歓迎ですので、是非とも「88 番札所?」の高松駅前シンボルトワーにお立寄りください。

最後になりましたが、関東支部の皆さまのますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。



季節のふるさとの味
土佐酒蔵

銀座 7-12-4 友野本社ビル B1
電 3545-3855 銀座第一ホテル通り

関東支部 学生・若手社会人交流会 in 2008

秋風が木枯しに変わり始めた11月8日(土)の東大駒場キャンパスに、昨年を大幅に上回る約90名の土佐校卒業生が集い、「学生・若手社会人交流会 in 2008」が開催された。

今年の学生・若手社会人交流会は、パーティのみであった去年までのスタイルから大幅にバージョンアップし、パーティの前に卒業生有志によるスピーチとパネルディスカッションを行うこととした。

記念すべき初回のメインスピーカーは、61回生の尾崎正直高知県知事をお願いすることとした。尾崎知事は、昨年12月に高知県知事に就任され、大阪府で橋下知事が就任するまでは、全国最年少知事であった。まさしく、母校の若手・中堅卒業生を代表する存在である。

尾崎知事は、まず、高知県の現状・課題について、客観的なデータを踏まえて詳細に解説された後、今まさに取り組まれているテーマのコアである「食」「観光」「県外へ打って出る」「産業間連携の強化」、そして県外にいる高知県人の協力について、熱いメッセージ



ジを述べられた。

県外に住む卒業生にとつては、高知県の窮状は感覚としてなんとなく分かっている。データで実感する機会とはほとんどないため、教育、産業、財政のいずれの面をとつても極めて厳しい故郷の現実に参加者からは驚きの声

が少なからず聞かれた。引き続き、尾崎知事に加えて、60回生の中山廣之さん、72回生の角陽一郎さんを交えた3名でのパネルディスカッションを行った。テーマは、

「東京で仕事をして得たもの、高知のためにできること」である。司会は、70回生の奥田寛司さんをお願いした。

このパネルディスカッションの狙いは、学生・若手社会人の参加者に、それぞれの得意分野を伸ばして仕事をしていけば、結果的に高知のためになることもあるし、逆に言

えば、高知のために何かしたいと思うのであれば、それぞれの得意分野や専門分野の中にこそ答えがあるのではないかという

気持ちを得てもらおうにあった。中山さんは、漫画家修行の中でウェブデザイン

という得意分野を見つけ、高知で起業後、東京に進出して事業を拡大されており、得意分野の仕事をしていることで結果的に高知のためになることを実践されている方である。

尾崎知事は、旧大蔵省・現財務省で行政に携わつてこられて、現在は、県行政においてその手腕を大いに発揮されている。角さんは、大学卒業後、こ

うく愛するよさこい祭りに仕事又はプライベートを通じて、一貫して関わり続ける中で、東京にいる県外出身の若者に高知・よさこいファンを増やし続けている。

極めて三者三様ではあるが、この多様性こそが土佐校のパワーの源である。パネラーに対しては、司会の奥田さんから、最初の仕事を選んだ理由、修行時代の苦労話、若手同窓生へのメッセージなど、次々と臨機応変かつパネラーの等身大の姿を引き出す質問が出された。

それぞれのバックグラウンドの違いを超えて、3名のパネラーから共通して聞かれたのは、目の前の仕事に常に全力で取り組んでいればそのうちに道が開けるということだった。

今回の会には、約30人の学生、約20人の20代の社会人が参加していたが、それぞれに何か響くものを得て、刺激を持ち帰って

もらえたなら、主催者としては大変うれし

い限りである。

主催者から若手の方へのもう一つのメッセージは、社会人として仕事をしているうちに、何かの分野の専門家や第一線で活躍している人が必要となつたら、まず土佐校人脈をたどつてみては?ということである。私の実感では、潜在的には、ほとんどすべての分野において求める人材が卒業生の中にあるように思う。もしいなかったとしても、卒業生から1人紹介してもら

うだけでも相当の人にとど

き続いて行われた交流パーティでは、社会人は積極的に学生の輪に入つて話をし、学生からも話を聞きたい先輩社会人への積極的なアプローチが実践されており、大変な盛り上がりであった。

超御多忙の尾崎知事も予定時間を超えて会の終わりの記念撮影までお付き合い下さった。

来年のこの会も、今年同様魅力的なスピーカーと企画を用意して、同窓会関東支部の秋の恒例イベントとして定着していくようにしていきたい。

最後に、パネラー及び司会の諸氏並びに準備の手伝いをして下さった方々、声掛け等でご支援下さった諸先輩方に心から御礼申し上げたい。

記 小松 岳志 (70回生)

牧野植物園のこと

38 回 生 片山直久

縁あって牧野植物園の手伝いをしていて。といっても草花に水や肥やしをやっているわけではなく、この植物園と牧野富太郎氏をもっとも全国的にPRして、その偉業を知ってもらうとともに観光客を増やそうというものである。

牧野植物園は富太郎博士の業績を称え昭和33年（一九五八）五台山に開園され、今年がちょうど50周年。約9年前、当時の知事橋本大二郎氏の時、大々的なリニューアル工事がおこなわれ、自然の地形を生かした6ヘクタールの広大な園内に記念館、展示館、ホール、アトリエなどを備え、充実した施設となった。これらの施設は環境に配慮したものとして第13回村野藤吾賞を受賞している。園内には約三千種の草木や花々が四季を彩り、展示館では牧野博士の偉大な生涯ドラマや植物画をみることで、記念館内テラスではフランス料理も楽しめる。近年入園者は10万人を超え、今年は記念行事が奏功し年半ばですでに12万人来園している。

現在園長は小山鐵夫博士で

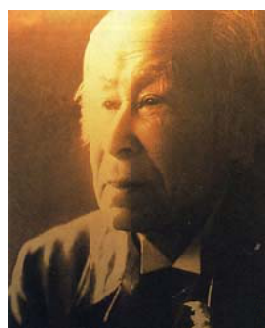
牧野博士の愛弟子。東大理学部を卒業後ニューヨーク植物園の研究官を40年以上にわたり勤めた経験のある国際的な方だ。小山さんは8歳の時牧野博士に手紙を書き、これが縁で弟子となった。リニューアル時に招聘され、研究型植物園の方向をめざし国の研究費や企業の委託研究などの外部資金をうける体制を整備し薬用植物の研究活動もスタートしている。頻繁に中国東北

部やミャンマーに研究活動に出かけ多忙をきわめている。また研究型とはいえ観光もおろそかにしないのがこの植物園の特徴である。50周年記念行事では花、人、土佐出会い博連携イベントなどを企画して、入園者は増加し県外からも注目されるまでに成長した。

小山さんとの出会いは2年前、仕事でお付き合いのある会社社長谷静子氏の紹介であつた。谷さんの先祖は高知で、土佐山田の学問の神社―谷秦山（幕末の朱子学者）にもつながる方である。

谷さん曰く
―片山さん高知出身でしょう。牧野植物園を見ました？お仕事が閑になるなら牧野を手伝ったら。

谷さんは現在牧野植物園の理事をされ、



87歳の時の牧野富太郎博士（し）としてその研鑽を続けなければならぬ義務と責任がある―といわれ、全国を行脚し植物学の普及にその一生を捧げられた。

またロータリー仲間、草花愛好家の女優司葉子さんも理事に名を連ねている。この谷さんの一言で東京在住の自称牧野植物園観光特使になった。

同窓会に出席した際、リニューアル後の植物園を見て、これは高知県にとり大変な観光資源だと確信する一方、牧野博士の、一生を植物研究に捧げた壮大なドラマに感嘆した。ぜひ一度行ってみたい。

―何時までも生きて仕事に、いそしまんまた生まれ来ぬこの世なりせば―

日本の植物の新種や新品種など千五百種以上の命名に携わった牧野博士の歌である。まだまだ植物の研究が十分にできていないので、もっと長生きして仕事をしたいという心情がこの歌に表れていると小山園長は言う。

そしてまた、―学者は死ぬ間際まですなわち身心が学問に役立つ間は、日夜孜々（し

裕福であったが小学校を中退、独学で植物学者を志し22歳で東大理学部で講師として出入りし66歳で理学博士となった。94歳でなくなれたが、展示館には、なくなれるまで住んだ練馬区東大泉の自宅が復元されている。東京都名誉都民および練馬区名誉区民に選ばれ、自宅は区管理下の庭園として開放、都区民に親しまれている。

さて、牧野植物園を地方区から全国区にするにはどうするか。たまたま知り合いの長宗我部友親氏に相談すると彼



50周年記念庭園



展示館の「牧野富太郎の生涯」コーナー



博士の蔵書45,000冊が寄贈されている

もかねてから牧野植物園に興味を持っていたのでぜひ手伝いたいとのこと。彼（殿）は長宗我部元親の弟、親房の十七代目で当然高知には縁のある人、有力通信社を退職され自分で出版関係のネットビジネスを立ちあげたところであった。殿の人気ウェブサイトを「空飛ぶ庭 (soratobuninao)」に現在牧野植物園のホームページのバナー（緑の庭）を載せたところである。

4年後がちょうど牧野博士生誕百五十年で、これに向けて現在いろいろな企画を

思案中である。また来年の緑の日に向けて、緑の人（グリーンマン）

・牧野博士の一生生き様を何とか有力TVメディアで放映できないか考えている。すでにNHKのラジオ深夜放送では園長自ら出演し植物園をPR、徐々



博士の自宅の復元模型。90歳の頃の博士の蠅人形が展示されている

に広報活動が根付いている。これからは地域再生という錦の旗の下、高知県の支援も当然必要であり、また広報活動のためには民間のスポンサーも探さなければならない。東京在住の高知出身の方々や土佐高校OBにもこれから協力を求めていると意気込んでいますのでよろしく願っています。

入園者は国内ばかりでなく、海外、特にアジアからも期待したい。これからの観光は外人観光客をいかに地域に直接誘致するかがポイントだろう。国内にはすでに奏功している

地域もあるようだ。高知は竜馬だけでなく、農業、さらに河水と観光の資源はゆたかだ。これらの価値を一層高め、竜馬が先鞭をつけた日本の開国につぐ高知県の観光開国を目

博士は多くの優れた植物画を残した



指せないものか。その際、牧野植物園は中心的な観光資源と位置づけられよう。現在の小山園長（理事長も兼職）の指導力は一層期待できるものの、官庁マネジメントにやや依存する経営から脱皮し、たとえばオープンキャリアシステムを採用して、より多く民間人を登用していくことも肝要であろう。

高知を浮上させるには県民一人ひとりが観光ガイドの意識をもつて土佐の観光をもりたてなければならない。東京ではいま観光検定がはやってる。たまけん（多摩観光検定）、えどけん（江戸文化観光検定）、ちゅうおうけん（中央区観光検定）など。高知もTOSAKEN（土佐観光検定）を開始されることを提案したいが如何だろうか。議論するも大事、やるのも大事。土佐人はやる前に議論するが、今はまずやるのが一番大事であると思っている。
- Practice makes perfect -

第十二回土佐高ハイクの会

群馬の山々へ 馬田宏 (37回生)

今回の目的地は日本百名山の内の赤城山と谷川岳、泊るのは水上温泉郷である。参加者は33名、70回生岡野啓さんの2才と0才の坊や達も一緒。今年も遠路をいわず38回生伊藤真紀子さんが広島市から、同じく38回生井上健郎さんが岐阜県山県市から、初参加の44回生荒木誠さんは水戸市から来ていただいた。ハイクの会の主導権を握る38回生の配偶者同伴が今回も少ないのは何故？

開越自動車道に練馬インターから乗り、前橋インターで出て前橋市内を抜け赤城の裾野をぐんぐん登り、予定どおり十一時半に標高1360mに



天神峠で谷川岳を背に全員で

ある赤城山ビジターセンターに到着、ここで登山組と散策組とに別れた。

元は火山の赤城山の外輪山の主峰が黒檜山で1828m、登山組は隣の駒ヶ岳経由でこの黒檜山へ向った。行程の殆どが林の中なので外の景色はたまにしか見えず、道は雨水が走り落ちる通路で狭く大小の岩が不規則に並んだ急坂が多く、ひたすら足元を見つめる道中で特に下りは気が抜けず、脚（膝）への負担が大きいく、思いのほか難行であった。それでも下山途中に見下ろせたカルデラ湖の大沼や湖畔の赤城神社の眺めは素晴らしく、下りきった時の達成感と満足感は大きかった。



黒檜山山頂。何も見えん

一方散策組はビジターセンター近くの小沼湖畔で昼食後小尾瀬とも呼ばれる覚満湖も一周そして大沼（冬は湖面が氷結しわかさぎ釣ができる）湖畔の赤城神社へと、ゆったりと散策を楽しんだ。

全員集合し、バスは赤城山の北側を下って再び関越道に乗り、水上インターを出て谷川温泉で一風呂浴びた後、宿に到着、利根川上流の湯桧曾温泉永楽荘というこじんまりとした旅館で、完全な貸切り宴会はやはり名司会者38回生中島宏さんの出番、誰も食べたことのないナマズの刺身（意外に美味）が出たりして大賑わい。宴の終りには、手拍子を何回もやることで参加者一同の和ができる、一本締めでは連帯感が出ないとの37回生の幸徳正夫さんの前振りに続いて三三七拍子で大宴会は和やかに締められた。

九月十四日（日）目覚めて



膝は笑う顔は引きつる黒檜の下り

雨かと思われたのは窓の外の溪流の音であった。朝食前に付近を散歩、溪流には既に二人の釣り人がいた。この辺りの標高は700m以上だがまだ寒くはない、女将が今日の天気はいいですよと太鼓判を押してくれたので安心。

7時25分に出発、近くの谷川岳ロープウエーの土合口（どあいぐち）駅に着く。22人乗りのゴンドラで標高1321mの天神平駅までの高低差573mを7分間で一気に登り、更にスキーリフトに乗り継ぎ1502mの天神峠に到着、ここで今日も登山組と散策組とに別れ、約6時間後に下の土合口駅で落ち合う予定。私は昨日下山の途中で左膝の関節が痛みだしたので谷川岳は散策組と決めていた。しかし、幹事は当然明日も登らないかとプッシュされ、また筋肉痛の塗り薬や温泉の効果か今朝は痛みがすっかり消えていたので行けるろう、途中でえろうなったら引き返してしまっただけ。しかし、道は赤城山同様狭くて岩だらけ、ロープや鉄鎖に頼る所も数箇所あり昨日に勝る難行苦行、大きな岩のある所で休憩してはも

うここで止めようか、まあもう一寸頑張ろうと又登り始める、を繰り返した。赤城山と違って周囲の見晴らしが素晴らしかったのが大きな励みになった。二つある山頂の手前側 トマの耳（1963m）に着いたのは登り始めてから3時間後の11時過ぎ、よう来たわとここを往路の終点とし弁当を広げた。しかし38回生沢村武彰さんと44回生荒木さんは更に先のオキの耳（1977m）までも踏破する健脚ぶり！

一方散策組は天神峠、天神平駅の近辺を散策後、土合口駅まで下り、ほぼ平坦な山道を約1時間半で一の倉沢出合いに到着、昼食となった。傍らには湯桧曾川が流れ、一の倉岳（1974m）の東斜面の沢がV字形に千mも見上げられる迫力満点のカメラスポット



トマの耳はえらいラッシュ

ト。岩場にとりついた登山者を、地元の山岳協会の人々が望遠鏡で見せてくれた、印象的な光景であった。

下山し、湯桧曾温泉の露天風呂で疲れを癒し、地元のを食べた後帰路につく。

お待ちかねの車中俳句の会の始まりである。昨日からひねった一人二句（無記名）から今回も38回生前田勝洋さんに温泉に入るいとまも与えず選句をお願いし、次の特選五句には去年同様陶芸家の38回生井上健郎さんから素晴らしき作品を贈呈していただいた。

更に秀作の五句（紙面不足で残念）には前田さんから記



湯桧曾温泉永楽荘

岡崎のおんちゃんの思い出話(六)

23回生 岡崎昌生

念品までいただいた、お二人に大感謝！

天(一位)

一ノ倉いき人の碑にキリン草

永野博子(38回生)

地(二位)

トリカブト誘惑まねく真紫

永森裕子(44回生)

人(三位)

姿なき小鳥さがして赤城山

伊藤真紀子(38回生)

四位

リンドウの谷川岳で生誕日

永野 浩(34回生)

五位

幼な子を抱いて嬉しい秋日和

吉本恵子(37回生)

選者と受賞者による解説は興味深く大いに今後の参考になった。奥さん(今日が誕生日の晴れ女)を神格化した句や、なにやら妖しい句(トリカブト)やら皆さんの柔らかな

頭には感心させられた。帰日も道路渋滞はなく、中村誠三さん(前号の筆山44号で紹介された37回生中村裕子さんの夫君)のプロ級の歌謡物真似やカラオケなどを楽しんでいるとバスは9時前に新宿駅西口に到着した。来年の幹事長は38回生の岡田四郎さんに決定し、来年の会での再会を約して散会した。

昭和22年(1947)3月、土佐中学校5年を卒業した。(これは丁度旧制の最終となり、4月からは新学制の6・3・3制が行われ、新しく中学校・高等学校が誕生した。)

私どもの5年間は、戦中、戦後にかけての波乱の年月であった。戦争中は、勤労奉仕あるいは勤労動員と称して、農作業、土木事業あるいは、工場の工員の手伝いなどに駆り出され、また、アメリカの空襲により、校舎は焼かれ、昭和20年の終戦の日以後は近在各地の小学校に間借りするなどがあつたが、多事多難のなかでも勉強に重点を置いた諸先生方のご指導・ご努力に対し、未だに感謝の気持ち忘れ得ない。中でも8月15日の昭和天皇の終戦の詔勅(いわゆる「玉音放送」)は、未だに記憶している。不敗の神国日本が鬼畜米英に敗れたこと、しかも、その事実を、神国の代表天皇目らの言葉の声によつて発表されたこと、ただただ謹聴するのみであつた。

9月にはマッカーサー元帥を総司令官とする連合軍が日本を占領することとなり、各都道府県に連合軍が駐留し、間接統治とはいへ、その管理下に入った。日本国民は、天皇のお言葉を守り「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」進駐軍の命令に服し、反抗など見られなかった。

連合軍は、まず財閥解体、日本の戦時体制を一掃する命令を出し、新しい政治への移行に着々と手をうていった。

昭和21年11月には新憲法が公布され、民法改正による旧来の「家」の制度が廃止されるなど社会の改変が行われた。

一方、町は焦土と化し半ば廃墟の中に人々は暮らし、食糧難、インフレの苦しみも味わつたが、復興への望みを持つて人々の顔は意外に明るかった。

中学卒業後、継ぐべき家業も無く、高知には就職先も乏しく、食糧難の都会に出る気力も無かつたところ、高知高校(旧制)に入る事となり、3年間で過ごした。

◇東京へ出て来てから

昭和25年(1950)2月、生まれて初めて「花の東京」に着いた。笈を負いてではなく、祖母にオニギリを10個ばかり作ってもらい、ジャコを紙袋に入れて、午前7時過ぎ高知駅発の準急南風に乗つた。高松・松山・宇高連絡船を経て宇野にいた。宇野駅で東京行き2両編成に乗り(これは岡山で東京行きに連結される)、翌朝10時

に東京に着いた。途中26時間を要したこととなる。敗戦後5年を経ていたとはいへ、まだ焼け跡は残っており、復興は途上にあると思われた。先ず生きていくため、住は、先輩の下宿の片隅に同居させてもらい、衣は学生服など高知で作つて持つていったが、食は外での「ご飯・うどん」には必ず外食券(縦1センチ、横3センチくらいの小片)を食堂に渡さなければならなかつた。同年6月、朝鮮戦争が起つたが隣国日本にはなんら被害は無かつた。ただ、何ヶ月か経つたころ外食券が無くても外食が出来るようになった、そして町はなんとなく賑やかになってきた。これは所謂朝鮮特需の影響で、皮肉な事に戦争が景気に好影響をもたらしたものである。

◇同窓会関東支部のこと

昭和25年5月、春の青空の下新緑に囲まれて、小石川植物園で同窓会の集まりが開かれた。集まつたのは家族同伴で60名ぐらいいであつた。当時はまだ配給制度で手に入りにくかつた日本酒を宮地貫一さんが調達して下され、一同楽しく口にした事を思い出す。



その頃、同窓生は東京近辺で50名にも満たなかつたが、最年長は1回生の片岡義信さんで、国鉄の自動車局長として丸の内北口のビルの広い部屋に鎮座されており額が少しハゲ上がつていたが、43歳の若さ、同窓生も20代30代がほとんどであり全員が1回生の集まりのほか、歓送迎会などをつづけてきた。

関東の同窓会で、6回生の近藤久壽治さんを忘れる事は出来ない。若い頃同窓社という出版社を創業(主としてドイツ語関係、アポロ・独和辞典を出版している。現在は「子息が後継」地の利を得た東京小石川に事務所があり、同窓会の打ち合わせに使わせて貰うなど、また、夕刻に及べば奥さんの手料理で、お酒を頂くことも数多く、万般に渡つてお世話様になった。

以後、東京に来る同窓生も次第に増加し、関東支部事務局の体裁も整い、事務局長41回の岩村康生さん、同じく鶴和千秋さんのお世話になり、次々に受け継がれ現在に至っている。昨今では、年次総会、懇親会の参加者は300名を超えるようになった。今後、益々の発展を祈る次第である。

第七回ガーナよさこい祭り&ガーナ高校生日本研修旅行

ガーナよさこい祭り

浅井伴泰 (30 年生)

灼熱の太陽の下、公園の森に太鼓の音が響きわたる。日本から一万五キロ以上離れた西アフリカのガーナの首都アクラで、二〇〇八年十月十一日に第七回よさこい祭りが開かれた。

七年前にワイフの発案に賛同頂いた同窓有志、高知の企業団体のご支援でスタートしたが、アフリカだけがよさこい未踏の大陸だったのと、よさこい誕生五十周年とが重なり、高知新聞の大山記者(64回)が取材に訪れ、記事は翌年元旦号一面トップを飾り二週間にわたり連載された。

セレモニーの後、選ばれた十五チームが大鼓を打ち鳴らし思い思いの音楽で踊りを披露した。殆どどのチームが「高知の城下へ来てみよう・」のメロディを上手にアレンジしていたのが愛嬌。三度目になる中村裕子さん(37回)が今夏来日の高校生チームに入って踊り、ご主人が撮影する微笑ましいシーンも見られた。清谷さん(52回)のスポンサーチームのハッピーの背中「祈土佐高校甲子園出場」の文字が躍った。「祈」が「祝」に変わるのはいつの日か。

同行のよさこい指導の第一人者の田村千賀先生はガーナ人の天性の踊りの上手さ、振りの奇抜さに驚きと称賛の連続だった。ファイナレは田村先生が正調鳴子踊りで締めた。祭りの夜、新任の片上大使に懐かしい公邸に招かれ、よさこい関係者と一緒に、和食をご馳走になった。

常にな資金集めの問題が付きまとうが、踊り子達の笑顔、目の輝きを見ると、何としても続けたいの思いが募る。

ナでのよさこい祭り開催とガーナ高校生招聘とを二本柱として活動しており、高校生来日は今年で五回目になる。

八月十五日夕、二十三名の高校生一行がドバイ経由で中部国際空港に到着。毎回空港では深夜の出国時と合せて同空港勤務の坂本裕宣さん(73回)にお世話になっている。名古屋からは新幹線で、定宿の広尾のJICAに着いたのは午後十一時を廻っており二日間わたる長旅に疲労の色が濃かった。

翌日元氣を取り戻したガーナ生は麻布学園生によるオリエンテーションの後、よさこいの初練習で交流を始め、サッカーの親善試合、都内見物などのプログラムを楽しんだ。



「祈土佐高校甲子園出場」の半纏を着て

ガーナ高校生日本研修旅行

中田昌志 (35 年生)

同期の浅井和子さんのガーナ大使就任直後にスタートしたガーナよさこい支援会はガー



麻布学園との親善サッカー試合開始

その後東洋英和、宝仙学園、鎌田先生引率の土佐校生六名が加わり交流は続いた。

一タ、在京ガーナ大使館に招かれ、ガーナ生は故郷の料理に、日本の生徒は異国のガーナ料理に舌鼓を打ち、ガーナ音楽での踊りと歓談に夜が更けた。



文化交流会でガーナ民俗踊り

ガーナ産カカオ豆を使い、ガーナチョコレートでおなじみのロッテ浦和工場見学では最新の機器と作業員の真剣な眼差しに感銘を受けたようだ。お土産に貰ったお菓子に大喜びし、ガーナ生代表が日本語でお礼の挨拶をしてロッテ側をびつくりさせる一幕もあった。

最後の代々木公園では大トリを務めファイナレを飾った。その夜の打ち上げ会は各校の先生を含めての乱舞の会になった。

二十六日より静岡に舞台を

ロッテ浦和工場での歓迎会



は両国の学生、ロッテ社員に、中村裕子さん(37回)・田口祥子さん(55回)も加わり総勢八十八人。連日の特訓の成果を二十四日の原宿『スーパールよさこい』で披露した。表参道十三時十五分のトップスタート。五百米弱二十五分の踊りは表参道いっぱい見物客の声援の後押しで見事な出来栄であった。原宿駅前の舞台では自信が付いて思いっきり踊り、観客の拍手が鳴り止まず、最後の代々木公園では大トリ

移し、昔ガーナで青年協力隊として教鞭をとった廣瀬桂子さん企画の交流となった。まずは禅宗洞慶院での二泊。座禅では座ったもののクスクスと声を出している生徒(バシツと警策(ムチ)が飛び、無心の禅修行が始まった。食事は「五観の偈」を朗誦して頂く。お粥を前にしたガーナ生が、梅干、塩に全員がきざと叫び、注文したのは何と「砂糖」。

お椀一杯に盛られた砂糖を次々にお粥に振り掛け笑顔で食べ始めた。これにはお坊さんがびっくり。夜は遅くまでお坊さん相手に『無』について禅



原宿スーパーよさこいに出場

問答をしていた生徒もいた。地元大学生らボランティアとの散策や、討論会も活発に行われた。静岡聖光学院、静岡英和女子学院との交流はホームステイ三泊。日本文化に触れ深夜まで歓談した模様。静岡駅では三日では短いと肩を抱き合って別れを惜しんでいた。

藤枝に移動しての市民との交流は、地元ヨサコイチームが参加。お互いに踊りを披露しあった。

最終日となったトヨタ自動車工場見学。まずは広大な敷地の大規模工場に驚き、次から次ぎと車を組み立てていくロボットの高精度技術、作業員の真剣な働きぶりに感心していた。トヨタ会館では展示されているスポーツカーやランドクルーザーのハンドルを握りオーナー気分写真を撮り合っていた。

九月一日二十三日、いっぱい思い出を抱いて帰国の途についた。

尚、ガーナ高校生の来日に先立って、西山彰一さん(48回)の友人で、ガーナよさこいの発起人の一人でもある高知大卒ガーナ大学農学部部長オウスさんが六月に来高 高知

の方々旧交を暖め土佐校では特別授業が行われた。

ガーナ高校生一行は、日本で見たこと、体験したこと全てが人生の貴重な財産となり、また交流した日本の高校生も同じく貴重な経験となったことと思います。このように国際交流の支援活動が出来た事はひとえに皆様方の暖かいご支援ご協力の賜物と感謝致します。

昨年はガーナゆかりの野口英世博士の出身地の猪苗代、来年は三年ぶりに高知で土佐校生との交流を計画しています。

ガーナよさこい支援会連絡先
〇三・三三四・三八三八

(浅井)

〇九〇・八八四九・三六五一

(中田)

ガーナ高校生との交流

土佐高校一年Kホーム

廣瀬悠華

私はこの夏「ロツテ・ガーナよさこい連」でよさこいを踊り、とても貴重な経験をすることが出来ました。

私は、最初はとてもとまどいました。ガーナと日本との間には文化の違いが当然のようにあり、さらに私は片言の

英語しか話せなかったからです。しかし、ガーナの人には本当に優しく、私のごちない言葉を聞き取り、理解してくれました。また、私が聞きとれないとゆつくりと丁寧に話してくれ、何とか理解することが出来ました。ガーナ人はまったく踊れない私にダンスを教えてください、私は徐々にガーナの文化にも慣れ、とまどいもなくなっていきました。

私がこの経験の中で一番嬉しかったことは、皆が私の名前を覚えてくれ、私の名前を呼んでくれたことです。ただ自分の名前を呼んで話しかけてもらっただけなのに、さらに仲良くなれた気がしてとても嬉しかったです。特に、よさこい当日によさこいを踊った後、ハイタッチをしたりハ



原宿スーパーよさこいでガーナ高校生と

グをした時は、全員でやり遂げた充実感と、一つになった高揚感で最高の気分でした。

ファザー(ガーナ高校生引率の牧師)が私に話してくれたように、日本だけとかガーナだけでなく、みんなと一緒に良くなっていけば、世界はもっと豊かになるし、幸せになれると思います。私は今回の経験をを通して、人と表面ではなく、もっと中身で付き合っていきたいと思いました。そして、多くの人との付き合いを通して世界に貢献していきたいと思いました。世界には色々な考えを持った人がたくさんいます。私はそんな人たちと、つながっていきたいと思っています。

私がガーナ人の人達と一緒に過ごせたのは四日間という本当に短い時間でした。私は今回このような貴重な経験をすることができて、ガーナの人達を知っていくうちにもっと一緒にいたいと思いました。ガーナのみんなと一緒に会話をしたり、ダンスしたり、一緒に笑いあいたいのです。

このような素晴らしい経験をさせていただき本当にありがとうございます。

自分にはぴんがあると思えることは本当に幸せだと感じる

ピアノリスト・作曲家

田中智子（70回生）



現在都内や関東を中心に、ジャズピアノのライブ演奏作曲活動、ブライダルピアノスト、中高生から大人の方までを対象としたポピュラーピアノの講師などを行っています。

土佐高を卒業する頃は、まだ自分の進路も決められずに一浪し、結局一般大学の人文学系の学部で音楽を専攻しましたが、大学生活を通してジャズピアノに興味を持ち、昔から好きだった作曲やピアノを活かして生活していきたいという気持ちが強くなって、卒業後2年間音楽留学をし、2002年末に帰国、今に至っています。

帰国当初は、やはりそんなに簡単にすぐに音楽の仕事があるわけでもなく、最初の一年間は、音楽とは関係ないアルバイトもしつつ、まずはヤマハポピュラーミュージックスクールの講師となりました。

その間、演奏を仕事としてやるにはどう行動していけば良いのか、また、自分の音楽活動を実践していくためには、ということなどを常に考えているうちに、披露宴やパーティー会場などでのピアノストとしても仕事が入るようになり、講師業としてもスカイパーフェクトTVの15分教則番組の枠を持たせて頂いたり、FMなどの電波や雑誌等にもよくたまにですが音や記事を載せていただいたり、今やずっと音楽という枠組みの中でも、自分のやりたい仕事や活動が少しずつできるようになってきました。

私のやっている仕事や音楽活動は、小さな独立事業主としてですので、すべての仕事や活動がいわゆる単発ものであり、常に自分で進んでいかないとそこでストップしてしまうといった感じで、大変な部分もありますが、反面好きなことを仕事にしていることもあり、それが苦痛になるといったことはお陰様で今のところありません。レッスン会場や教則TV番組の放送局、ブライダル会場の現場などでは、それぞれのスタッフや社員の方々のご苦労を目の当た

りにしながらも、一つ一つの現場で、自分は講師だったりピアノストだったりとといった立場で仕事をして、それぞれの現場の違った状況を楽しんでやっています。基本的に毎日が違う現場での仕事となるため、不規則であったり、気疲れも多少あるのですが、自分にはピアノストである、音楽講師であるという立場をはっきりと自覚することによって、生徒の方々や視聴者、お客様に喜んでもらえるのは、大変ありがたいことだと思います。

時は、曲がりなりにもミュージシャンになって本当に良かったと思います。

自分のリーダーライブには、土佐校時代の友人も忙しい中よく遊びに来てくれ、本当に土佐の友人のネットワークにはお世話になっており、感謝しています。まだまだ、お客様も多い時と少ない時の差も激しく、たまたま来ていただいたお客様からうれしい感想を頂いたり、時にはその逆もあるのですが、バンドのメンバーも当然それがその日の仕事となるわけですので、本当に真摯に演奏をやってくれまして、良いと思う音楽が演奏できたとき、また、お客様に良い時間を過ごしたなと思って頂けた時などの実感は何物にも代えがたいものだと思います。

今年の10月には、なんとか自分で作曲した曲ばかりを集めた自己名義のジャズピアノのCDもリリース致しました。基本的に自主制作なのですが、これまで経験してきた仕事やネットワークを活かして、大手のレコード会社や雑誌などでも扱ってもらえる流通に何とか載せることもでき、今は正直ほっとしています。

仕事面でも音楽活動面でも一つ一つが常に一本勝負の本番ではあります。

高知県、また土佐校で育った環境を思い返すと、音楽オンリーという状況で育ったわけではないですし、他のジャズミュージシャンと比べても、何が何でもピアノでと思う時期はどちらかといえは遅かったと思いますが、道を広く考えられる、また少しのこと



初CD「Piano Scenes」のカバー



セッション2008 演奏写真

ふるさとへの手紙(十二)

東京大学公共政策大学院一年

古谷 文平 (78 回生)

顧問であった渋谷先生に、僕を含めたサッカー部の卒業生が寄せ書きのボールを贈ったことを今でも覚えていて。僕はそこに「BIG になりました」と記した。特にこれといった夢や青写真があったわけではなく、面白半分ですうしたはずだ。

(渋谷先生すいません！)

しかし、「なる」と言ったからにはならねばと思うのが人の常である。「ではどこで？」といった問いに一つの答えを与えてくれたのが大学生生活だった。

大学時代、僕はインドとフィリピンの子どものための教育支援を行っている NGO (非政府組織) の活動に携わった。実際にインドとフィリピンを訪問し、眼前の貧困に衝撃を



左から二人目が筆者。他はフィリピンの人達

受けた。なぜなら、僕はそれまで貧困という問題を頭の片隅に置いたことさえなかったし、まして途上国を訪れたことがなかったからである。この経験は、僕の目を世界の諸

問題に向けさせるのには十分だった。事実、僕の学問的関心分野は、アフリカの紛争へとシフトしていった。

ところで、こんな話を老若男女問わず同郷の人にするの大抵不思議がられる。思えば、

僕も高知県で暮らしていた頃は上記のようなことは露知らず、日々天空の下(もと)サッカーに明け暮れていた。その同じ空の下の違った「現実」の中で何かできないか。これが今自分が考えていることであり、どういった道のりを歩むかは決まっていらないが「BIG」になるならここかなと漠然と思っている。現在僕は大学院でアフリカの紛争や国際政治経済を勉強しており、多少なりともそれを反映させたいという思いもあるからだ。

そんな思いを抱えている僕には、土佐中高をはじめとした県下で学ば後輩に伝えたいことがある。世界の「現実」に目を向けてみて欲しい。世界は驚くほど多様性に満ちていて、自分の目の前の現実と高知からそれは遠い「現実」とのギャップに戸惑うかもしれない。でも一旦落ち着いて考えてみると、様々な疑問が浮かび上がってくることに気づく。それは「なぜ貧困が存在するの?」という反射的な疑問から「生きるって何?」

といった哲学的な問いまで幅広い。そのような問題意識を持つことは自分の人生や将来を考える上での一つの切り口になると思う。世界の「現実」を通して多感な時期にそのような多くの疑問に出会ってほしい。

とは言いつつも、余程主体的にならないと世界の「現実」に目が向かないし、そこから問題意識を持つに至らないと思う。だから、僕は話好きという自分の特性を活かし、出会った人に自分が見てきたあるいは知っている世界の「現実」について話す。面白いもので、土佐中高の後輩や NGO の啓蒙活動で訪れた中学校の学生にそれについて話すと、「へえ、そんな世界があるがや(んだ)」と大変興味を示してくれる。余談だが、最初アフリカの紛争を勉強していると言った時には「ほうそうか。」と余り興味なさげだった祖父も、僕が一貫して勉強していたせいか、僕が大学時代に書いたアフリカの紛争に関する論文を読んでもくれた。こうやって僕は「BIG になる」道を歩んでいる。

は動じない、前向きに取り組める、ということ自然而然と学べる環境だったことは自分の大きな強みになっています。またあらゆる分野で頑張っていたり活躍している土佐の友人のネットワークは本当にすごいものがあり、宝だなと感じます。今後もマイペースですが前向きに、音楽活動や表現を続けていきたいなと思っています。

ジャズなどのライブは、基本的に気軽にお酒でも飲みながら聴いていただけのような場です。色々な場所で、時には硬派な演奏であったり、エンターテイメント的なものであったり、BGM 的なものであったりと様々な演奏をしております。お仕事帰りに気軽に寄るような環境や文化が、もともと日本に根付くと良いなと思います。高知での演奏となると、現時点では正直、企画が自分にはまだ難しいかなと思いますが、いつか里帰りライブもできると良いですね。http://www.tanakasatoko.net に音楽活動の詳細等載せております。今後も応援していただけるとありがたいと思います。

★出版リーダー★

大橋一章 (36回生)

「歴史手帖 法隆寺と聖徳太子」 日本歴史 (724) [2008. 9]

「虞囚の記憶を贈る(第13回) 山西省太原の日本軍性暴力」 世界 (783) [2008. 10]

「虞囚の記憶を贈る(第12回) 破局的体験後の社会の対応」 世界 (782) [2008. 9]

「虞囚の記憶を贈る(第11回) 死の恐怖をともなう性暴力」 世界 (781) [2008. 8]

「虞囚の記憶を贈る(第10回) 継承される「強制労働の文化」」 世界 (780) [2008. 7]

「秋葉原無差別殺傷事件 狂気の型「アキバ系アモン」」 週刊朝日 113(34) (通号 4891) [2008. 7. 18]

「虞囚の記憶を贈る(第9回) 満州から日本へ連続する「劳工狩り」」 世界 (779) [2008. 6]

「田中宏氏に反論するー原告団長を人質者と呼ぶ人間観」 世界 (779) [2008. 6]

「書評と紹介 中澤正夫著『ヒバクシャの心の傷を追って』」 大原社会問題研究所雑誌 (通号 585) [2008. 6]

塩田潮 (40回生)

「キーマンたちが語る福田退陣と小沢政局の本音 (特集 小沢一郎の研究) 中央公論 123(10) (通号 1494) [2008. 10]

「『日本一のセールスマン』は、弱った宮崎県をどう元気にしたか」 芸人知事 改革 一年半の通信簿
プレジデント. 46(20) [2008. 9. 29]

「高知県馬路村、ゆずの村で年間二〇億」 潮 (通号 585) [2008. 9]

「与野党激突・最終戦争の攻防ー政治の構造はどのように変わるか」 経済倶楽部講演録 (715) [2008. 9]

「内幕徹底検証 小沢民主党に政権担当能力はあるか」 諸君 40(7) [2008. 7]

「政治 危機の福田政権ー何も決まらないう、何も動かない政治の行方」 改革者 (通号 575) [2008. 6]

「『危機』と対峙する新リーダーに求められるもの…… 国民自身がリーダーを鍛える『民意』の結託」が第一要件 (総力特集にわかに高まる世界不況の危機 指導力なき「日本のドタバタ政治」 大改革への課題)

「戦後憲法政争史(第21回) 中曽根 衆参同日選」 「解散権」に立ちかけた一一票の重み
ニューリーダー. 21(10) (通号 252) [2008. 10]「戦後憲法政争史(第20回) ポスト中曽根もからみ政争の武器になった「衆参同日選」 憲法問題」
ニューリーダー. 21(8) (通号 250) [2008. 8]「戦後憲法政争史(第19回) どう裁く「首相の犯罪」 ロッキード疑獄究明で「迷走」する政治と司法」
ニューリーダー. 21(7) (通号 249) [2008. 7]「戦後憲法政争史(第18回) 疑惑政府高官公表に賭ける三木武夫とロッキード政局の攻防」
ニューリーダー. 21(6) (通号 248) [2008. 6]「戦後憲法政争史(第17回) 佐藤栄作「本土並み返還」は「他策ナカリシフ信ゼム」といえる道だったのか」
ニューリーダー. 21(5) (通号 247) [2008. 5]

「FDCS政治 求心力が遠心力か、候補擁立がもたらすもの」 週刊東洋経済 (6163) [2008. 9. 20]

「FDCS政治 党勢の解散シフト、その成否はどうか」 週刊東洋経済 (6159) [2008. 8. 16]

「FDCS政治 政局運営に自信か、持久戦で勝負の首相」 週刊東洋経済 (6152) [2008. 7. 12]

「FDCS政治 厭戦気分との野党、論戦は秋に持ち越す」 週刊東洋経済 (6147) [2008. 6. 7]

高岡等 (49回生)

「うつ病の混乱ー科学・社会・経済のはさまる(日本精神病理・精神療法学会 第83回大会(倉敷) シンポジウム 抑うつ・の現在)」 臨床精神病理 29(3) (通号 88) [2008. 8]

「身体表現性障害 (特集 メンタルヘルス新時代)ー(メンタルヘルス関連疾患と治療)」 臨牀と研究 85(6) (通号 1001) [2008. 6]

坂東真砂子 (51回生)

「渇き(熱帯夜スベシャル人生を豊かにする性愛ー(女流作家3人「競艶」・書き下ろし短篇)」 婦人公論 93(17) (通号 1256) [2008. 8. 22]

門脇護 (53回生) (ペンネーム 門田隆博)

「司法の欺瞞 光市母子殺害裁判」 W11. (45) [2008. 9]

「秋葉無差別殺人の深層」 W11. (44) [2008. 8]

「本村洋さんー難病と闘った凄絶な半生 (光市母子殺人事件)」 W11. (43) [2008. 7]

英保未来 (54回生) (ペンネーム 大森望)

「大森望の56観光局(第23回) さよなら、限りなき大森の夏」 SFマガジン. 49(11) (通号 631) [2008. 11]

「大森望の56観光局(第22回) トマス・ディッシュの遺言」 SFマガジン. 49(10) (通号 630) [2008. 10]

「大森望の56観光局(第21回) 人生に必要なことはメルリに学んだ(その2)」 SFマガジン. 49(9) (通号 629) [2008. 9]

「大森望の56観光局(第20回) ゴッソの極意ー「インサイド宇宙気流」傑作選」 SFマガジン. 49(8) (通号 628) [2008. 8]

「大森望の56観光局(第19回) 人生に必要なことはメルリに学んだ(その1)」 SFマガジン. 49(7) (通号 627) [2008. 7]

★出版リーダー★

大原健士郎 (24回生)

「あるがままに生きる」 2415号 星和書店 2008. 07

倉橋由美子 (29回生)

「暗い旅」 735号 河出書房新社 2008. 09

「大人のための怪奇掌篇」 500号 宝島社 2008. 07

「酔郷譚」 1575号 河出書房新社 2008. 07

「偏愛文学館」 500号 講談社 2008. 07

鍋島高明 (30回生)

「天才相場師の戦場」 2100号 五台山書房 (河出書房新社) 2008. 06

「日本相場師列伝」 750号 日本経済新聞出版社 2008. 05

塩田潮 (40回生)

「戦後政治の謎 自民分裂を予感させる『30の真実』」 940号 講談社 2008. 09

杉山雄一 (41回生)

「分子薬物動態学」 8925号 南山堂 2008. 04

高山宏 (42回生)

「アリス狩り」 3780号 青土社 2008. 08

「実体への旅」 (訳) 8400号 産業図書 2008. 08

矢野龍彦 (46回生)

「ナンパ式ー元氣生活」 1575号 ミシマ社 2008. 07

門脇護 (53回生) (ペンネーム 門田隆博)

「なぜ君は絶望と闘えたのか」 1365号 新潮社 2008. 07

「神宮の奇跡 学習院大野球部栄光の日」 1575号 講談社 2008. 11

英保未来 (54回生) (ペンネーム 大森望)

「マール・アーチの風」 (訳) 2100号 早川書房 2008. 09

酒井俊彦 (58回生)

「『おいしいキッチン』はじめました」 1575号 ラルズ 2008. 10

清谷知郎 (52回生) (ペンネーム 崎村泰斗)

「自分の命に放火しないで下さい」 1470号 宝島社 2008. 1

「開業医崩壊」 1890号 宝島社 2008. 7

ここからは雑誌に掲載されています

尾池和夫 (34回生)

「特別対談 俳人 物理学者、そして総長と」 俳句研究 75(4) [2008. 秋]

「初めて考えたこと」 犯罪と非行 (157) [2008. 8]

「地球の中を見る新しい眼ー『先端巨大科学』で探る地球』を読め」 IP. 37(8) (通号 430) [2008. 8]